

只今闘病中―読書ノート⑱

## へ運動・思想へ史の方法をめぐって―個人的体験の内省という通路

『日本の社会主義』（加藤哲郎）・「精神のリレーについて」（樋谷雄高）・『極私的六〇年代追憶』（太田昌国）を読む

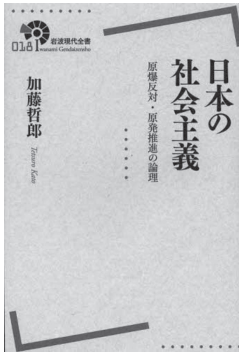
天野 恵一

（3・11）原発震災後の破局的事態に突き動かされるよ

をまとめた。

うにして、この間明らかにされてきた問題。広島・長崎・ビキニの被爆体験という悲劇をバネにつくられ、持続されてきた反原発運動は、その運動の内側に、強固に原発推進の思想と論理をくみこんでいた。この恐るべき事実を反核運動史・戦後史の暗の中から掘り起こして示してみせるという大切な作業。一瞬にして多くの人がとによって開始されたこの作業。私もこの連載で、たくさん紹介してきた、その作業。このパラダイム・チェンジを加速するバラバラに取りくまれていた集団的な作業の中でも、埋もれていた資料（事実）を引っぱ

り出し批判的に検証しなおす加藤哲郎の仕事は突出していた。その加藤が『日本の社会主義―原発反対・原発推進の論理』（岩波書店）



加藤は「あとがき」で、こう書いている。

本書はひとりの社会学者として、また社会主義とマルクス主義についてこれまで多くの著作を発表し発言してきた者としての、自省の書である。これまでネオ・グラムシ主義、ポスト・マルクス主義や市民社会主義と称して、現存社会主義やコミンテルンについては批判的に論じながらも、多様でひらかれた社会主義の可能性を語ってきた。しかし、二〇一一年の東日本大震災、福島第一原子力発電所メルトダウンに直面して、自分自身を含む社会主義の政治思想的「欠落」に、衝撃を受け、足元から揺さぶられた。それを、「問題」と受け止めて、「すべてを疑え」「汝の道を歩め、人びとには言うにまかせよ」を座右に「社会主義と原子力」の軌跡をまとめたものである。（傍点引用者）

「3・11」体験を通して、二十世紀を「原子力の世紀」ととらえるべしと考えなおし、「社会主義の概念」そのものの根本の見直しを試み、「社会主義」を標榜してきた政党や知識人の原子力観を総ざらいし」「とくに武谷三男の『原子力の平和利用』論の軌跡と屈折を体験しながら」現在までをたどり「あえて3・11後に『脱原発』『原発ゼロ』を語りうる条件をさぐり、『非戦・平和』から出発した理想『核なき世界』へとつなぐ切開」をし、「社会主義」の深刻なほころびをとさほぐし」「民主主義の横糸の編みあげ」の必要を訴えたい」。

その「あとがき」は、以上のように結ばれていた。

日本共産党のトップであった徳田球一の「原爆のパワー」の全面讚美（軍事力にとどまらない）が語られている「原爆パンフ」（社会主義のそれであれば放射能被害などまったく存在しないかのごとき、それ）の存在。これと対応するアメリカの広島・長崎への原爆投下を「人道的」「平和のため」と讚美し続けた武谷三男の戦後のスタートから、「原子力平和利用」（原発推進）イデオログぶりの連続、そして武谷の「説明なしの退却」への正面からの批判。

私は、武谷の原爆投下讚美は、なんと八〇年代にまでくつかえされており（過去の発言の正当化というスタイルで）、何度か明示的な批判を八〇年代に書いており、よく知っていた。それでも加藤の「説明なき退却」のプロセス

のこまかい思想的追跡の作業は私の頭の中でボンヤリしていた問題を非常にクリアにしてくれるものであったのだ。

もう一人、日本平和委員会の委員長として、「戦後の平和運動の象徴」といえる平野義太郎。彼を自然科学者武谷と対応する社会科学者の代表としてとりあげ、戦後の「平和利用イデオログ」ぶりをも歴史的にキチンと批判している。加藤は自分の思想的故郷へ、仮借なき批判のメスをふるっているのだ。

「わが党は一貫して反原発でした」などと、信じられないことを公言しつつ現在の反原発運動の中を走り続けている、日本共産党への強い不信が、こうした作業を加藤に必然化させたのだろう。ここには、自分の歴史的欠落を自認した人間の思想的「自省」が、よく読める。

私は、この本を、長く続けている読書会である〈戦後〉研究会の共通テキストに提案（戦後思想と原子力がこの間のテーマ）。そこで読後感を語り合った。そこで以下のようなやりとりが印象に残った。

「著者の自分史、体験が何も語られていないで、共産党らの中心イデオログへの批判が、それは十分に根拠を認めしているとはいえ、あれこれ提示されているのみであるのは、おかしくないか」。

「いや、武谷・平野批判を通して自己批判していると、

読んでいいのではないか。」

「それは、あまり著者にやさしすぎないか。」

私はそのやりとりを聞きながら、こう考えた。著者固有の体験や思想は、武谷や平野にまることかきなるわけがない。だから、個の次元の問題をまったく欠落させた〈思想・運動〉史の客観的整理は自己の内省プロセスを具体的に明示しない結果、読者がその失敗から積極的に学ぶための糸口をうまく手にできない。その点が本書の「社会科学的方法」(もちろん著者は、それを十分自覚的採用しているのであろうが)への不満だな。

内省的〈思想・運動〉史の整理の書といえ、太田昌国の『極私的六〇年代追悼・精神のリレーのために』(インパクト出版会)がある。私が雑誌(『インパクション』)に連載中(二〇〇八年から二〇一〇年)にまめに読み続けたこの文章は(3・11)後に書かれた一章プラスされて単行本化された。

太田は「あとがき」でこの「極私的追憶」は「六〇年代」との自己対話」であり、〈極私的〉追憶を通してこそ「協働できる仲間(同志)」と出会」いを求めている、と語っ



ている。それはサブタイトルが「精神のリレーのために」である点にもよく示されている。

この太田の「極私的」読書録(あるいは読書と運動の回想記)ともいべき、この本は、時代の中の教養の豊かなつみあげの努力に支えられた威力によって、十分に時代の思想の語りになっている。こういう作業ができる人間は少ない(私は、すぐ海老坂武の長い読書録の回想記ともいべき「自伝」を思い出したが)。

この、決して書齋の中の読書録でない、時代の運動の流れの中で読み、考え続け、日本の植民地支配の責任を問いつづけるというテーマを深化し続けた「追憶」の持つ独特の魅力については、私は、たとえば齋藤慎爾の「(早すぎた自叙伝)かもしれないが、氏の生の軌跡は追尋に値する」(『出版ニュース』「ブックハンティング」二〇一四・〇三下)という評価に、基本的に同意する。

それは、前提にして、ここでわたしが論じたいのは、この本から受け取った、私の違和感の方である。

モヤモヤとした違和感について、できるだけ、具体的に語らなければなるまい。例えば第五章「高揚の後の沈滞 敗北の後の混迷と頹廢 清水幾多郎と三好十郎」である。ここで太田は、清水幾多郎の朝鮮戦争下の、「社会主義国善玉」「平和勢力」論」信仰に支えられた平和論をとりあげている。そこで、この当時の左翼ジャーナリズムのスター

清水の主張を進歩派左翼の世界の中で、トコトン孤立しながら激しく批判した三好十郎の批判について肯定的に論ずるといふかたちで。この三好の批判を支える「自省」。理性では戦争反対でありながら同胞が殺されていく時間の中で、敵をにくみ、戦争協力に走ってしまった、自分の過去の「恥」の体験を「自己凝視」自己内省」しながら戦後をスタートした三好への強い共感を語りながら。もちろん、この点は、まったく私も、その通りというしかない。

ただ、この章を雑誌で読み終わった時、なにか、どうも不足している、という気持ちにおそわれたのを、よく憶えている。

その「不足」感の根拠は、どうやらこうしたことだったと思う。

三好は、社会主義国（北）が軍事的侵攻をするなどということは、ありえない、とする清水の主張に「兵士・軍」を常にロマン化する文化を生きている社会主義国への恐怖を語り、清水のイデオロギー（神話）を正面から否定してみせたのである。そういう判断を持たせたのは、先にふれた、三好の「恥しい」体験への徹底的な内省である。そして三好はこの内省をふまえ、「プロレタリア解放のための戦争―軍事Ⅱ暴力」を積極的に肯定する「マルクス主義Ⅱ共産主義」の、「兵士」の論理（かつて自分が一体化したそれ）そのものである「共産主義」に公然と反対の声を上

げているのである。さらに三好は、どのような時でも、決して武器だけは手にしない（絶対非暴力Ⅱ抵抗）主義者を宣言している。

一九九八年に私は、この清水批判をテコにしたこの三好の思想的立場と宣言について一文書いている。「（暴力）と（非暴力）運動の中の、あるいは運動としての」（二〇世紀の政治思想と社会運動）（フォーラム90s 研究委員会編・社会評論社）がそれである。この時、論争の中の発言をも含めてまとめて三好を読み直して、この時『私は、三好とまったく同じ立場（絶対的非暴力主義）に立てるか否かはともかく、この孤独な「反共左翼」の思想と精神は、キチンと自分の中で、リレーしていこうと強く思った。

太田の文章は、三好のこうした思想にまでおりていくことをしていない。具体的に、それが、私になにか「不足」していると思わせた点であったのだろう。それでは三好のリレーされるべき精神のバトンが、よく見えないではないか、そう思ったのだ。

太田が「精神のリレーのために」というサブタイトルをつける契機になったのは埴谷雄高の「精神のリレーについて」（講演をおこしたもの。埴谷、島尾敏雄、小川国夫、秋山駿、真継伸彦、小田実の講演集『精神のリレー』〈河出書房、一九七六年〉のトップに収められている）であろうと私は推測し、私は、あらためて一九七一年五月三日に

亡くなった高橋和己の追悼と植谷の『死霊』全五章の上梓、記念をひっかけたユニークな一冊、いくつかの講演会の記録である、それを読みなおしてみた。

植谷は、そこでこのように語っている。

私は、ドストエフスキイを読んだらドストエフスキイに生まれられたとか、ドストエフスキイを読んだというだけでドストエフスキイに責任を感じると述べていますが、私が勝手にそういうふうに見えるのは、ドストエフスキイの作品のなかにある目に見えない力強い放射があつて、ある課題をつきつけながら、『お前もリレーしろ』と命じているというふうに私は理解しています。それである以上、ドストエフスキイが例えば数百マイル走ってリレーするなら私は一〇メートルでもいいけれども、とにかく走ってゆき、また誰かにリレーして伝える、そういう永劫の渴望を書かなければ白い紙に対して済まない。白い紙に何か書いて汚す以上は、何者かにこの渴望の何らかをリレーしなければ済まないというふうにいる文学観があるために、私流の小説を書いているわけです。ところが、この精神のリレーというものは非常に難しいことです。なぜならばリレーするとき渡されるバトンをよく見ますと、

そのバトンには『より深く考えること』と刻み込まれている。そんなふうには『より深く考える』といわれても、ドストエフスキイ以上により深く考えるということなど大変なことであります。けれども、リレーのバトンには「より深く考えること」と刻まれている以上、仕方がないから、より深く考えようとする姿勢だけでもって、リレーに走り出さなければならぬ。魂の渴望型の人間の文学態度は、そういうものであると思います。(傍点引用者)

私は魂の渴望型の人間などではないし文学者などでもない。しかし、こういう思想的態度は私なりに理解でき、共感する。

さて課題をつきつけ、深く考えよと命ずる、「精神のリレー」ということを考えると、太田の「第八章 近代の懷疑、先住民族集団の理想化——太田龍が、悲喜劇的に、固執したものに」にも、リレーすべき課題の欠落を強く感じさせられた。「世界革命運動情報」を共に編集していた太田昌国の当時の仲間(同志) 太田龍は、「中国の(核)実験」を熱烈に支持し続けていた人物であったはずである。第四インターナショナルの日本支部の機関誌『世界革命』にも当時の代表的イデオログとして書いている。いくつもの論文を、わたしはあらためてまとめて読んでみた。植民地

（第三世界）解放のための核兵器賛歌である。このスタンスは「世界革命運動情報」の時代も、持続していたはずである。

それはいつてみれば新左翼の「原爆パンフ（論文）」である。そんなふうに私には読めた。

〈3・11〉以後、グロテスクなまでに思想的に可視化されてきた「社会主義（共産主義）と原子力」という課題。ここに集中的に示された負性について「より深く考えてみる」精神のリレーが果たされる必要が、今こそあるはずだ。太田昌国のこの本には、その「深く考える」課題のバトンが欠落している。

この課題の全面欠落は、私には、ひどく気になった。

加藤哲郎の自覚的に個人的内省を排除した方法による〈運動・思想史〉より、この問題に関しては個人的内省という方法を自覚的に駆使している太田の方に、〈自省〉の欠落を感じるのには、私だけであろうか。

（あまのやすかず／本誌編集委員）